

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：小岩 広平（臨床心理学コース）

■ 研究題目
デート DV の被害者は、交際前に加害者のパーソナリティをどのように認知しているのか
■ 研究代表者・分担者 氏名
小岩 広平（臨床心理学）（代表者） 石垣 那実（臨床心理学） 内山 彩香（臨床心理学） 関 芙美（臨床心理学）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
【問題と目的】 近年、交際関係にある二者間の暴力、すなわち Dating Violence(以下 DaV)が深刻な社会問題となっている。Dating Violence は、夫婦間での暴力の概念が、婚姻前のカップル間の暴力の問題へと展開したことを契機とし、1980 年後半から海外で研究が行われるようになった(Lewis & Fremouw, 2001)。一方で日本では、山口(2003)が日本に Dating Violence の概念を紹介したことをきっかけに、2000 年以降に学術的研究もおこなわれ始めている。 DaV の特徴として、一度加害と被害の関係性が形成されることにより、関係を断つことや、第三者の介入が困難であることがある。まず、日本では、DaV がカップル間の問題としてとらえられることが多く、重大な加害事件に至らない限り法的および民事的介入がされにくい実態がある(松村, 2019；警察庁, 2020)。また、暴力の発生後のカップルは、共依存的な関係性が形成され(富安・鈴木, 2008)、「我慢する」「何もしない」という消極的な対処行動をとることが多い(寺島他, 2013)。さらに、暴力に長い間さらされた被害者は、被害を「暴力」と認識できなくなる傾向がある(西村, 2013)。その結果、加害者と被害者の関係性が固定化されることにより、暴力行為はエスカレーションし、重大な被害へと深刻化していく(赤木他, 2010)。このように、現代社会における DaV は、若者にとって身近で重要な問題であり、介入や解決の難しさから深刻な被害へとエスカレートしていくものである。 DaV の予防のための取り組みは、プログラムを用いた態度変容のための取り組みが

中心であるが、このような予防啓発活動には、次の二つの課題が残されている。一つ目は、暴力の発生リスクを暴力の発生前に評価する必要性である。たとえば、小畑(2013)は、それぞれのカップルにおいて、暴力の発生リスクを事前に評価しておくことが、より効果的な DaV 発生の予防につながる可能性を指摘している。事前に暴力の発生のリスクを把握することができれば、暴力が深刻化する前の段階で被害者が異なる対処行動を選択したり、学校などの組織が該当するカップルに対する注意を高めたりといった方向性で、DaV 予防の新たな方向性を示すことができるだろう。しかしながら、DaV の発生前に、リスクの評価や前兆を試みている研究はいくつかあるものの(武内・小坂, 2011; 荒井, 2011), その数は少ない。

近年の DaV 予防活動のもう一つの課題は、被害者の認知の検討である。従来の DaV の予防プログラムは、加害者や加害リスクの高い者を対象としたものが多いが、加害者にはプログラム参加の動機付けが低い場合があり、効果が出にくい(Shorey, et al., 2012)。DaV 予防のもう一つの課題は、被害者の認知の検討である。DaV の予防プログラムは、加害者を対象としたものが多いが、加害者にはその動機付けが低い場合があり、効果が出にくい(Shorey, et al., 2012)。また、DaV は、恋愛関係という閉鎖的な関係において生じるため、当事者以外が暴力の発生を認知しにくいということがある(矢野, 2021)。できる限り早急な介入が求められる DaV においては、暴力が深刻化する前の時点で被害者が積極的な対処をとれるようになることが重要であり、そのためには被害者視点を重視した未然予防が必要であると考えられる。これらの知見を総合すると、① DaV のリスク評価を、暴力の発生前に、②被害者視点で行うことができるのかについて、③数量的エビデンスを提示する研究が求められる。

本研究は、DaV の被害者が暴力の発生前の段階で、DaV のリスクをどのように認知しているのかを検討するものである。一方で、DaV のリスク要因の研究において、中心的なテーマとなっているのが、加害者のパーソナリティ要因に関するものである(川合, 2019)。たとえば、加害者の自己愛傾向(松並他, 2012)、ジェンダー意識(西村, 2014; 岡本, 2013)、暴力の容認傾向(井ノ崎・野坂, 2010; 植田・安藤, 2010)など、幅広いパーソナリティと加害行動の関連の検討がなされてきた。この中でも本研究では、暴力の加害に結びつく可能性があり、かつ他者評価が可能なパーソナリティ特性として、ビッグ・ファイブ、攻撃性、愛着不安の3つに着目する。

ビッグ・ファイブ理論は、パーソナリティ構造に関する基本的かつ、最も広くコンセンサスを得ている理論である(Goldberg, 1984)。ビッグ・ファイブ理論は、人間のパーソナリティを、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つからとらえようとしており、他者評価が可能であることも確認されている(内田, 2012)。ビッグ・ファイブのうち、神経症傾向の高さと協調性の低さが、攻撃行動と関連するとされている(Bettencourt, 2006)。攻撃行動の研究では(Bettencourt, 2006)、神経症傾向が高いも

のは、日常的に心理的苦痛や否定的感情を感じる頻度が多く、それらの感情を処理する方法をもたないため、社会的に不適切な行動をしやすいとされている。また、協調性の低い者は、他者への不信感をもち、葛藤場面において相手を攻撃したり、罰したりする傾向があると指摘されている。実際に、Hines et al.(2008)は、若者の Big Five と DaV の加害経験の関連を調査し、男性においては神経症傾向が、女性においては外向性、神経症傾向、協調性、誠実性が、それぞれ加害と関連することを明らかにしている。

また、DaV の発生要因として、多くの研究で扱われているのが、加害者の攻撃性である。攻撃性とは、怒り感情をはじめとした敵意的感情の表出・抑制の在り方を示す(安藤他, 1999; 大竹他, 2000)。人間の攻撃性について、怒り感情への向き合い方の側面から検討した Muller は、怒りを表出する傾向、怒りを抑制する傾向、怒りを適切に表現する傾向、怒り感情にともなった罪悪感を抱く傾向の4つの観点から検討している。さらに、これらの傾向は、他者からの評価が可能であることも確認されている(大竹他, 2000)。一方で、攻撃性の高さが DaV 加害と関連することを示す知見は多くある。海外の青年を対象とした調査では、攻撃性の高い青年が、カップル間の問題に対して暴力を用いた対処を行うことを報告している(Kerr, & Capaldi, 2011)。また、我が国においても、加害者の攻撃性の高さが恋人に対する DaV の加害経験に結び付くことを示した研究が多くある(藤田・米澤(2009; 井ノ崎・野坂, 2010; 井ノ崎・野坂, 2012)。以上の知見をふまえると、加害者の攻撃性は、DaV の発生を予測する危険因子の一つであるといえる。

また、近年の DaV 研究において、着目されつつある個人要因が、加害者の愛着不安である。愛着不安は、Bowlby の愛着理論(Bowlby, 1969)を、乳幼児期の親子関係から成人期以降の恋愛関係や配偶関係に拡張したことで発展した議論である。愛着不安は、他者から見捨てられるかもしれないという不安である「見捨てられ不安」と、親密な関わりを避ける傾向である「親密性の回避」の二つの側面を内包している(島, 2010)。親密な他者に対する愛着不安が高い者は、親密な他者に対する被受容感をもてなくなり、抑うつが生じるとされている(金政・浅野・古村, 2017)。

この愛着不安もまた、DaV の発生と関連が指摘されている要因である。愛着不安の高い者は、相手をコントロールしようとする側面が強く、その結果 DaV の発生に結び付くと論じられている(Diane et al., 2002)。実際に、Lee, Reese-Weber, & Kahn(2016)は、加害者が不安定な愛着の様相が、加害経験に結び付くことを明らかにした。我が国においても、愛着不安との関連について、男性においては「親密性の回避」が DaV 加害経験と、女性においては見捨てられ不安の高さが加害経験と、それぞれ関連すると報告されている(井ノ崎他, 2012)。さらに、愛着不安と DaV 加害の縦断的研究では、加害者のもつ愛着不安が、6 か月後の暴力の発生を予測することが明らかになった。

これまでの議論のように、DaVは、関係性が固定化されることによるエスカレーションの問題が指摘され、リスク要因を事前にとらえることの重要性が指摘されている。しかしながら従来の研究では、DaVの発生前におけるリスクについて扱ったものは少なく、被害者視点でリスク要因をどのように評価しているのかについて明らかにすることが求められる。そこで、本研究では、リスク要因として加害者のパーソナリティ特性に着目し、DaVの被害者が、交際前の時点で加害者のパーソナリティをどのように推測していたのかを検討することを目的とする。具体的には、以下の二つの研究を行う。研究Iではまず、基礎的なパーソナリティ構成であるBig Five理論と、DaVの加害との関連が多く検討されている攻撃性、愛着不安の3つの変数について、被害者は加害者のそれらの傾向を推測しているのかどうかを明らかにする。そのうえで研究IIでは、研究Iで示された変数に時期要因を加え、DaV被害の有無による暴力要因と、交際前の想起および現在の時期要因の2つの要因から、交際相手のパーソナリティ推測を明らかにする。

研究I 被害者の加害者に対するパーソナリティ推測に関する横断的研究

調査対象者

1050名(男性369名、女性680名、性別未回答1名、平均年齢24.34, SD=3.22)が調査に参加した。

調査時期

調査時期は、2021年11月～12月である。

フェイスシート：年齢、性別

交際相手について：交際年月、交際相手の性別、交際相手のイニシャル、同居の有無、関わりの頻度、関係性の進行度合い(松井, 1993)について回答を求める。

交際相手のパーソナリティの推定：内田(2002)が作成したBig Five Scale 短縮版(以下、BFS-S)20項目を全て使用した。BFS-Sは十分な信頼性と妥当性が示されており、他者の印象評定のために作成された尺度である。Big Five Modelにもとづく5つの性格特性である「協調性」、「情緒不安定性」、「勤勉性」、「経験への開放性」、「外向性」をそれぞれ測定することが可能である。尺度は20項目が含まれている。本研究では、交際相手の性格について回答を求めており、1.まったくあてはまらない～10.非常によくあてはまるの10件法により回答を求めた。

交際相手の攻撃性の推定：Muller(1993)が作成し、大竹他(1999)が邦訳した日本版Muller Anger Coping Questionnaire(MAQ)を用いた。1. 全くあてはまらない～5. 非常にあてはまるの5件法であり、23項目により構成されている。すでに他者評定に用

いることの妥当性が大竹(1999)において検討されており、他者評価が可能な攻撃性に関する尺度である。本研究では、交際相手について回答を求め、交際相手の攻撃性や対処について回答を求めている。

交際相手の愛着不安の推定：「親密な対人関係体験尺度一般他者版」(中尾, 2010)を用いた。この尺度は中尾・加藤(2004)が作成した「親密な対人関係体験尺度」を、中尾(2010)が他者評価用に改良したものである。すでに、他者評価に用いるための妥当性が検証された尺度である。30項目から構成されている。本研究では、交際相手の愛着不安がどの程度なのかを測定するために使用し、「1. まったくあてはまらない」～「7. 非常によくあてはまる」の7件法により回答を求めている。

DaVの被害経験：相馬・浦・落合・深澤(2004)によって作成され、相馬・具志堅・上田(2007)によって改変されたパートナーからの間接的暴力被害の測定尺度を用いた。尺度には、6つの項目が含まれており、回答者には自身の経験について、「1 = 全くなかった」から「5 = 非常によくあった」の5件法により回答を求めた。

不良回答者の検出：不良回答者の選出のため、増田・坂上・森井(2019)が作成したInstructional Manipulation Check 課題を用いた。

結果

分析対象者の選出

IMC 課題において、不良回答者として検出された 56 名を除外した。また、性別が未回答であった 1 名および、交際段階についていずれも経験していなかった 1 名を除外した。その上で、要因の統制のため、交際相手の性別が同性であった回答者(18 名)、無回答者(7 名)、トランスジェンダーであった回答者(1 名)を除外した。その結果、966 名(男性 336 名、女性 630 名、平均年齢 24.38, SD=3.23)が回答者となった。

交際相手のパーソナリティの推定と IPV 被害の関連

交際相手とのパーソナリティの推定と IPV 被害の関連を検討するため、IPV 被害得点を目的変数とした、階層的重回帰分析を行った。説明変数としては、回答者の性別、交際期間、会話の頻度、交際相手の性格特性推測 (Big Five)、交際相手の攻撃性推測、交際相手の愛着推測を用いた。分析においてはまず、基礎的な変数の統制のため、Step1 として回答者の性別、交際期間、会話の頻度を強制投入法により投入した。そのうえで Step2 として、交際相手の性格特性推測 (Big Five)、交際相手の攻撃性推測、交際相手の愛着推測の変数を、ステップワイズ法により投入した。なお、交際の進行段階は交際期間と、同棲の有無は会話頻度と正の相関を示していたため、多重共線性を防ぐため、分析には用いなかった。分析の結果を、Table1 と Table2 に示した。

Table1. 交際相手のパーソナリティの推定による DaV の被害得点の予測（男性）

	Step1	Step2
交際期間	.13*	.08
会話頻度	.17**	.07
協調性		-.13**
怒り表出		.58**
怒り主張性		-.09*
見捨てられ不安		.13**
R^2	.05**	.53**
ΔR^2		.48**

Table2. 交際相手のパーソナリティの推測による DaV の被害得点の予測（女性）

	Step1	Step2
交際期間	.07	.08*
会話頻度	.09	.02
協調性		-.27**
怒り表出		.45**
見捨てられ不安		.15**
R^2	.01*	.47**
ΔR^2		.46**

考察

交際相手のパーソナリティの推定と DaV の被害の関連

研究 I では、本研究で扱った変数のうち、DaV の加害と関連したのは、神経症傾向の高さ、協調性の低さ、攻撃性の高さ、愛着不安の高さの 4 つであった。

まず、パーソナリティの推定の中でも「協調性の低さ」が、DaV の被害経験は有意に予測していた。協調性が低いと認知しているカップルでは、暴力の被害がある可能性があることが推察された。Big Five の中でも、「神経症傾向の高さ」と「協調性の低さ」が攻撃行動と関連するが (Bettencourt, 2006)、本研究はこの結果を部分的に支持した結果となった。協調性の低い者は、他者への不信感をもち、葛藤場面において相手を攻撃したり、罰したりする傾向があることが指摘されている (Bettencourt, 2006)。したがって、協調性が低いために、被害者を罰する傾向があるといえる。また、重回帰分析の

結果から、神経症傾向は除外されたが、相関係数をみると、DaV の被害と神経症傾向の有意な関連がみられていた。協調性との関連が強かったため、重回帰分析からは除外されてしまったと考えられる。

「攻撃性」の中でも、交際相手の「怒り表出」の傾向を認知している場合に、そのカップルでは DaV の被害が起きている可能性があることが明らかになった。攻撃性の高さとカップル間の加害経験の関連を示す研究は多くあるが(Kerr, & Capaldi, 2011; 藤田・米澤, 2009; 井ノ崎・野坂, 2010; 2012), 本研究の知見はこれらの結果と一致していた。

また、「愛着不安」の中でも、交際相手の「見捨てられ不安」を認知している場合に、その人物は被害を経験している可能性があることが明らかになった。相手をコントロールしようとする側面が強く、その結果 DaV の発生に結び付くと論じられているが(Diane et al., 2002), 本研究も同様の結果が得られた。

これらの結果が示すように、DaV の発生を予測する危険因子として想定されている「協調性の低さ」、「攻撃性の高さ」、「愛着不安の高さ」は、被害者の推定した場合においても、攻撃と有意に関連していた。この結果は、DaV の被害者が加害者のパーソナリティを適切に見抜いていることを示したものである。被害者が否認している可能性が指摘されてきたが、実際には多くの被害者は加害者のパーソナリティを、怒りを表出し、見捨てられ不安が高く、協調性が低く、罪悪感を抱かない人物であると認識していることが明らかになった。これらの知見の多くは、加害に結び付くことが明らかになっている加害者のパーソナリティ特性であり、被害者が加害者のパーソナリティを、適切に推測していることが示唆されている。

研究Ⅱ 被害者の交際前におけるパーソナリティ推測に関する研究

研究Ⅱでは、被害者が推測できる加害者のパーソナリティ推測について、時期要因を含めて検討することを目的とした。

方法

調査概要

ヤフー株式会社が運営するクラウドソーシングによる Web 調査を実施した。①18 歳から 29 歳であるもの、②交際関係にあるが、婚姻関係にないパートナーがいることを募集条件とした。回答者は調査協力に同意を示した 18 歳以上 29 歳以下の日本国内在住の 264 名（平均年齢 23.93 歳, SD=3.44, 男性 99 名、女性 163 名、性別不明 2 名）であった。調査時期は、2022 年 2 月であった。回答者には、調査が完了した段階で、

Yahoo の Web サイト上で用いることができるポイント（100 円相当）を支払った。

質問紙構成

フェイスシート：年齢、性別

交際に関する基礎的情報、交際相手のパーソナリティの推測、交際相手の攻撃性の推測、IMC 課題、DaV の被害経験について、研究 I と同様の項目を測定した。なお、本研究では、現在時点と、交際前の想起について、回答を求めた。交際前については、それぞれの項目について、交際が始まる前の段階で、〇〇さんにどの程度あてはまると思っていましたか。なお、初対面のときではなく、交際が始まる直前のことを思い出しながら答えてください。」と教示した。また、現在時点では、「今現在、あなたが抱いている〇〇さんの印象や、あなたが思っている〇〇さんの性格についてお聞きします。次の項目は、〇〇さんにどの程度あてはまると思いますか。」と教示した。そのうえで、操作チェックとして、「あなたは、交際前に〇〇さんに抱いていた印象や性格について、どの程度思い出すことができましたか」と教示し、「全くできなかった」「できなかった」「あまりできなかった」「少しできた」「できた」「非常にできた」の 6 件法で回答を求めた。

結果

分析対象者の選定

IMC により不良回答として検出された 28 名、恋愛における段階をいずれも経験していない 5 名を除外した。また、交際相手の当時のパーソナリティについて、思い出すことが「全くできなかった」「できなかった」「あまりできなかった」と回答した 31 名を除外した。最後に、要因の統制のため、交際相手の性別が同性と回答した 12 名、交際相手の性別を回答しなかった 4 名、過去に婚姻歴があった 5 名を除外した。残りの 179 名(平均年齢 23.94, SD=3.42、男性 56 名、女性 123)を分析対象とした。

推測されたパーソナリティ得点の差異

DaV 被害者が、交際前の時点で推測していたパーソナリティの特徴について検討するため、分散分析を行った。分析は、以下の手順で行った。まず、DaV 被害得点の平均値を算出したところ、平均値は 10.68 であったため、DaV 被害得点が 11 点以上の回答者を DaV 被害高群 ($N=99$)、11 点未満を低群 ($N=80$) として割り振った。また、性差の統制のため、性別を要因の一つとした。したがって、回答者の性別要因 (男性×女性)、DaV の被害要因 (低群×高群) の 2 つの被験者間要因に、時期要因 (想起した交際前のパーソナリティ推測×現在のパーソナリティ推測) の被験者内要因を加えた、混合計画の 3 要因分散分析を実施した。

まず、推測された交際相手の「外向性」得点を従属変数とした結果、時期要因の主効果が見られ、交際前よりも ($M=6.97$), 現在において ($M=7.15$), 外向性を高く認知していることが示された ($F=4.39, p<0.05$)。

次に、推測された交際相手の「神経症傾向」得点を従属変数とした結果、時期要因の主効果がみられ ($F=9.54, p<0.01$), 交際前よりも ($M=5.09$), 現在において ($M=5.54$), 神経症傾向を高く認知していることが示された。同時に、DaV被害の主効果がみられ ($F=15.28, p<0.01$), 低群よりも ($M=4.89$), 高群のほうが ($M=5.85$), 神経症傾向得点が高いことが示された。

また、推測された交際相手の「協調性」を従属変数とした結果、DaV×時期の交互作用がみられた ($F=5.14, p<0.05$)。単純主効果の検定の結果、時期を交際前に固定した場合には、被害低群 ($M=8.04$) よりも被害高群 ($M=7.46$) が高く ($p<0.05$), 時期を現在に固定した場合には、被害低群 ($M=8.22$) よりも被害高群 ($M=7.24$) が高いことが示された ($p<0.01$)。

さらに、推測された交際相手の「勤勉性」を従属変数とした結果、時期要因の主効果がみられ ($F=31.08, p<0.01$), 交際前よりも ($M=6.82$), 現在において ($M=6.01$), 勤勉性を高く認知していることが示された。同時に、DaV被害の主効果がみられ ($F=26.76, p<0.01$), 低群よりも ($M=7.03$), 高群のほうが ($M=5.74$), 勤勉性が低いことが示された。なお、開放性については、いずれの要因とも有意な関連が示されなかった。

攻撃性を従属変数とした結果、推測された交際相手の「怒り表出」について、性差×時期、DaV×時期の交互作用がそれぞれ有意であった ($F=3.98, p<0.05$; $F=13.09, p<0.01$)。単純主効果の検討を行ったが、性差×時期では有意差がみられなかった。他方で、DaV×時期については、時期要因を交際前に固定した場合に、被害低群 ($M=1.51$) よりも被害高群 ($M=2.22$) が高く ($p<0.05$), 時期を現在に固定した場合に、被害低群 ($M=1.35$) よりも被害高群 ($M=2.42$) が高かった ($p<0.01$)。

また、推測された交際相手の「怒り抑制」を従属変数とした結果、時期×性差の交互作用がみられた ($F=12.63, p<0.01$)。単純主効果の検定の結果、性別を男性に固定した場合に、時期要因による有意差が見られ、交際前 ($M=2.74$) よりも現在 ($M=2.43$) の怒り抑制得点が低いことが示された ($p<0.01$)。

他方で、推測された交際相手の「罪悪感」を従属変数とした結果、性差×DaV被害×時期の3要因による交互作用が示された ($F=4.49, p<0.05$)。単純主効果の検討を行った結果、以下の3つの部分に有意差が示された。まず、DaV被害を低群、時期要因を現在に固定した結果、男女差が見られ、男性よりも ($M=2.02$), 女性のほうが ($M=2.52$), 罪悪感得点が高かった ($p<0.05$)。次に、性別を男性に固定し、DaV被害を低群に固定した結果、時期による差異が見られ、交際前 ($M=2.46$) よりも、交際後において ($M=2.02$), 罪悪感得点が高かった ($p<0.01$)。そのうえで、性別を男性に固定し、時期を現在に固定した結果、暴力の有無の差異が見られ、DaV低群 ($M=2.02$) よりも DaV被害高群 ($M=2.79$)

のほうが、罪悪感が高かった ($p<.01$)。

最後に、怒り主張性を従属変数とした結果、交際時期と性差の交互作用が見られた ($F=5.37, p<.05$)。性別を女性に固定した結果、時期の差が見られ、交際前 ($M=2.44$) よりも現在 ($M=2.66$) のほうが、怒り主張性が高いことが示された ($p<.05$)。

考察

交際相手に対するビッグ・ファイブの推測

研究Ⅱでは、DaVの被害者が、交際前の時点で推測している加害者のパーソナリティを明らかにすることを目的とした。まず、ビッグ・ファイブを従属変数とした分散分析の結果、「勤勉性」「協調性」「神経症傾向」の3つのパーソナリティ特性について、DaV被害の有無と有意な関連が示された。

まず、協調性について、DaV被害者は加害者を協調性の低い人物として認知していることが明らかになった。協調性の低さは攻撃行動との関連が指摘されるパーソナリティ特性であり、他者への不信感から攻撃行動を行うと指摘されているが(Bettencourt, 2006)、本研究の結果はこの知見と一致した。すなわち、DaVの加害者は協調性が低い傾向にあり、その傾向を被害者は適切に推測していると考察される。この結果は、研究Ⅰとも一致しており、再現性の高い結果であると推察される。

また、「神経症傾向」と「勤勉性」を従属変数とした結果、時期要因およびDaV被害の主効果が認められた。このうち、「神経症傾向」もまた、攻撃行動との関連が示されているパーソナリティ特性であり、日常生活での否定的感情を、交際相手を標的にして不適切に発散する傾向が示されている(Hines et al., 2008)。本研究により、被害者が加害者の神経症傾向を高いと推測した結果は、加害者が被害者に対して不快感情を攻撃行動として表出する傾向があり、被害者はそれを適切に評価していることが示唆されている。

また本研究では、交際前の想起と現在の時期要因をふまえて、被害者によるパーソナリティ推測を検討した。その結果、「協調性」を従属変数とした場合に、交際前の時点で、被害者が加害者の協調性が低いと推測している単純主効果が示された。さらに、「神経症傾向」は、交互作用がみられず、DaVの主効果が有意であったことから、時期に関わらず、神経症傾向が高いと推測していることが示された。加害者の「協調性の低さ」と「神経症傾向の高さ」はどちらもDaV発生リスクファクターであるが、これらを被害者が交際前の時点で認知していることが明らかになった。DaVの発生予防に関する研究では、DaVのリスクを事前にアセスメントすることの重要性が指摘されているが(小畑, 2013)、被害者のパーソナリティ認知はその一助となることが考えられる。

一方で、勤勉性についても、DaV被害との関連が示された。勤勉性は、これまでの

DaV 研究においては、加害との関連が示されていなかったパーソナリティ特性である (Hines et al., 2008)。一方で、DaV 以外の攻撃行動の研究においては、勤勉性の低さと攻撃行動に弱い関連があることを示したものもあり (Mitsopoulou & Giovazolias, 2015)、本研究の結果と類似している。DaV の加害とビッグ・ファイブの関連を検討した研究が少ないため、勤勉性と暴力の発生に関しては、さらなる議論が必要だろう。

交際相手に対する攻撃性の推測

本研究では、DaV の発生リスクの一つである加害者の攻撃性についても検討した。その結果、「怒り表出」を従属変数とした結果に DaV 被害の有意差がみられ、被害者は加害者の「怒り表出」の傾向の高さを、認知していることが明らかになった。攻撃性の高さと DaV の加害経験の関連を示す研究は多くあるが (Kerr, & Capaldi, 2011; 藤田・米澤, 2009; 井ノ崎・野坂, 2010; 2012)、本研究の知見はこれらの結果と一致していた。すなわち、攻撃性の中でも、怒り感情を外に表出する傾向が高い者が、恋人に対しても攻撃の形で怒りを表出し、被害者はこれらの傾向を認知していることが示唆されている。さらに、時期要因を含めた単純主効果の検定の結果、交際前の時点においても、怒り表出の有意差がみられた。この結果から、「協調性」「神経症傾向」とともに加害者の怒り表出傾向もまた、被害者が交際前の時点に推測できる DaV の発生要因であるといえる。

一方で、「怒り抑制」「罪悪感」「怒り主張性」を従属変数にした結果、DaV 被害者に特徴的な結果は示されなかった。この 3 つの変数のうち、「罪悪感」を従属変数にした分散分析のみ DaV 被害の交互作用がみられたが、単純主効果がみられたのは、DaV 低群に固定した場合および時期を現在に固定した場合に限られていた。したがって、被害者が交際前の時点において、DaV 加害者の「罪悪感」を被害者が事前に察知することは難しいと推察される。さらに、「怒り主張性」や「怒り抑制」は、性差や時期要因による差異はみられたものの、交互作用および主効果は示されず、DaV との有意な関連はみられなかった。これらの結果は、DaV の要因よりも、関係性の深化によって生じる変化であると推察される。たとえば恋愛研究では、関係性が深まるにつれ、自己開示と葛藤がどちらも増加する (高坂, 2014)。このように、恋愛関係が進行し、お互いの理解の深まりや葛藤的なコミュニケーションが増加したことによって、怒りを用いてお互いの意見を主張する場面が増えたり、交際相手のことを「怒りを抑制できない人物」として認識するようになったりすると考察される。

本研究の意義と今後の課題

本研究では、DaV の発生前におけるリスクを被害者がどのように評価しているのかについて明らかにすることを目的とした。研究 I では、被害者が加害者のパーソナリテ

ィをどのように推測しているかについて、検討することを試みた。また、研究Ⅱでは、時期要因を踏まえて検討し、被害者の交際前のパーソナリティ傾向について、DaV被害の有無や現在の推測の比較によって検討することを試みた。その結果、交際前において有意差が見られたのは、「協調性の低さ」と「怒り表出傾向」の二つであった。さらに、時期要因と関連せず、被害者は「勤勉性の低さ」と「神経症傾向」の高さを認知していることが明らかになった。これらの結果は、被害者からDaVのリスク要因である加害者のパーソナリティを、暴力の発生前からとらえることができることを示唆するものである。この発見は、従来のDaV予防の介入に新たな視点を与えるものである。これまでのDaVの未然予防に関する介入の多くは、予防啓発プログラムの実施が中心であり、DaVに関する当事者の態度の変容を目的としていた。これに対して本研究は、暴力の発生リスクを、被害者が事前に認知することが可能であることを示唆したものであり、この知見から異なるアプローチの提言が可能である。たとえば、この知見を心理教育に応用すれば、被害者が暴力の発生前からリスクを認知し、深刻化する前の段階で対処行動を変えることができるかもしれない。または、加害者にアプローチせずとも、ハイリスクなカップルを抽出する試みが可能となり、DaV予防の二次的な予防へと発展することも期待される。このように、従来の予防の取り組みに新たな視点を与えるものとして、本研究はDaV予防の発展に寄与すると期待される。

一方で、本研究にはいくつかの限界が残されている。一つ目は、被害者が関係性を継続する動機の検討である。本研究において、被害者が加害者の攻撃性や情緒不安定性を、交際が始まる前の段階で推測していることが明らかになった。この知見は、被害者がこれらを認知していたにも関わらず、交際を始めたことを示すものであり、これらのリスク認知が加害者からの回避には結び付かなかったことを示唆するものである。そのため今後の研究では、被害者が加害者の攻撃性や協調性の低さをどの程度重視していたのか、これらの性格の変容可能性や対処可能性がどのように帰属されていたのかなど、認知的側面の検討を深めることが必要である。二つ目は、縦断的研究の必要性である。本研究で用いた回想法を用いた研究方法は、想起の正確さの懸念や、現在のパーソナリティ推測に影響を受ける可能性を否定できない。したがって、今後の研究においては、一時点における交際相手のパーソナリティ推測が、将来の被害の発生や悪化に結び付くことを示す、縦断的研究が求められるだろう。

引用文献

赤木麻衣・佐藤恵子・奥野雅子・今泉紀栄・長谷川啓三 (2010). ドメスティック・バイオレンスに至る相互作用の悪循環についての一考察 東北大学臨床心理相談室紀要, 8, 83-98.

赤澤淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデート DV 発達心理学研究,

26(4), 288-299

- 赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・下村淳子・松並知子 (2021). デート DV 第 1 次予防プログラムの開発と効果検証 —高校生を対象として— 心理学研究, <https://doi.org/10.4992/jipsy.92.20008>
- 安藤明人, 曾我祥子, 山崎勝之, 島井哲志, 嶋田洋徳, 宇津木成介, ... & 坂井明子. (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討. 心理学研究, 70(5), 384-392.
- 荒井崇史・三浦絵美・吉田富二雄 (2010). 交際相手からの暴力に関する研究 (1) —交際相手からの暴力とリスク認知, 被害不安, 予防行動との関連性— 日本心理学会第 74 回大会
- Bettencourt, B. A., Talley, A., Benjamin, A. J., & Valentine, J. (2006). Personality and aggressive behavior under provoking and neutral conditions: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 132(5), 751-777.
- Cornelius, T. L., & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 12(3), 364-375.
- 藤田絵理子・米澤好史 (2009). デート DV に影響を及ぼす諸要因の分析と DV 被害認識の明確化による支援の試み 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 19, 9-18.
- 深澤優子・西田公昭・浦光博 (2003). 親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討 対人社会心理学研究, 3, 85-91.
- Goldberg, L. R., & Rosolack, T. K. (1994). The Big Five factor structure as an integrative framework: An empirical comparison with Eysenck's P-E-N model. In C. F. Halverson, G. A. Kohnstamm, & R. P. Martin (Eds.), *The Developing Structure of Temperament and Personality From Infancy To Adulthood* Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Hines, D. A., & Kimberly J. Saudino, K. J. (2008). Personality and intimate partner aggression in dating relationships: the role of the "Big Five". *Aggressive Behavior*, 34(6), 593-604.
- 松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎 敦子・上野淳子 (2012). デート DV の実態と心理的要因—自己愛との関連を中心に— 女性学評論, 26, 43-65.
- 松井豊 (1993). 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64(5), 335-342
- 松村歌子 (2019). DV 防止法の課題と加害者への働きかけのあり方: ニューヨーク州の DV 施策を手掛かりに 法と政治, 70(1), 397-439.
- 松野真 (2017). デート DV における加害・被害経験タイプと加害者の特性 教育カウンセリング研究, 8(1), 1-11.
- 増田真也・坂上貴之・森井真広 (2019). 調査回答の質の向上のための方法の比較 心理学研究, 90 (5) , 463-472.
- 内閣府男女共同参画局 (2021). 男女間における暴力に関する調査報告書 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h29_boryoku_cyousa.html

- 西村愛里(2013). 大学生のデート DV の実態(1)—沖縄大学学生へのアンケート調査における被害・加害の実態— 地域研究, 12, 57-73
- 西村愛里(2014). 大学生のデート DV の実態(2)—沖縄大学学生へのアンケート調査におけるデート DV の背景要因—地域研究, 13, 167-177.
- Not Alone (2022). notAlone -デート DV の情報提供と啓発サイト- <https://notalone-ddv.org/>
- 岡本亮樹(2013). デート DV に及ぼすジェンダー・ロールとパワー・リレーションの影響 福山大学こころの健康相談室紀要, 7, 9-17.
- 内田照久(2002). 音声の発話速度が話者の性格印象に与える影響 心理学研究, 73 (2), 131-139.
- 寺島 瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ (2013). 大学生におけるデート DV の実態の把握：被害者の対処および別れない理由の検討 筑波大学心理学研究, 45, 113-120.
- 井ノ崎敦子・野坂祐子 (2010). 大学生における加害行為と攻撃性との関連 学校危機とメンタルケア, 1, 73-85.
- 井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・赤津淳子(2012). 大学生におけるデート DV 加害及び被害経験と愛着との関係 学校危機とメンタルケア, 4, 49-64.
- Kerr, & Capaldi (2011). Young men's intimate partner violence and relationship functioning: long-term outcomes associated with suicide attempt and aggression in adolescence. *Psychological Medicine*, 41, 759-769
- 警視庁 (2020) 配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律 警視庁
- 高坂康雅.(2014). 大学生の恋愛行動の進展. 和光大学現代人間学部紀要, 7, 215-228.
- 小畑千晴(2013). デートバイオレンス可能性尺度の作成について 奈良大学大学院研究年報, 45-52.
- 相馬敏彦, 浦光博, 落合麻子, & 深澤優子. (2004). 恋人・夫婦間暴力被害の抑制に及ぼす対人的影響 行動科学, 10-7.
- 相馬敏彦・具志堅伸隆・上田真由美 (2007) 日本社会心理学会第 48 回大会
- 武内珠美・小坂真利子(2011). デート DV 被害女性がその関係から抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究--複線経路・等至性モデル(TEM)を用いて 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 33(1), 17-30.
- Lewis, A. F., & Fremouw, W. (2001). Dating violence: A critical review of the literature. *Clinical Psychology Review*, 21(1), 105-127.
- Mitsopoulou, E., & Giovazolias, T. (2015). Personality traits, empathy and bullying behavior: A meta-analytic approach. *Aggression and Violent Behavior*, 21, 61-72.
- 富安俊子・鈴井江三子 (2008). ドメスティック・バイオレンスとデート DV の相違および支援体制の課題 川崎医療福祉学会誌, 18(1), 65-74.
- 植田由紀子・安東由則 (2010). 高校生のデート DV に関する実態調査の分析--予防教育

デート DV の被害者は、交際前に加害者のパーソナリティをどのように認知しているのか

活動の実践から 臨床教育学研究, 16, 65-86.

大竹恵子, 島井哲志, 曾我祥子, 宇津木成介, 山崎勝之, 大芦治, ... & 安藤明人. (1999).
日本版 Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検
討. 感情心理学研究, 7(1), 13-24.

山口のり子 (2003). デート DV 防止プログラムの実施者向けワークブック 梨の木舎